

尾島菊子『教育勅語御伽噺 少女の一念』のこと

西田谷 洋

富山文学の会には短い間参加していたものの、金沢から通勤することを選ぶと平日夕方という例会の開催時間帯は体が持たないので出席できず、出欠を問われるのがとても心苦しく退会させてもらった。しかし、この十年は愛知教育大学では愛知や石川の文学について多少まとめ、富山大学では富山ゆかりの文学に触れることで地域に何らかの還元をしたいという思いはずっと持っている。金子幸代さんが編まれた三巻本『小寺菊子作品集』を通して小寺菊子の作品を読み解き、徳田秋聲とつなげていこうという私の心秘かな目論見もそうした中から生まれたものである。その点で富山文学の会にはとても感謝している。

今回、本稿で触れたいのは八木光昭さんが集められたのであろう富山県立図書館洗足文庫所蔵の一冊、尾島菊子『教育勅語お伽噺 少女の一念』（金港堂書籍一九〇八・一二）である。『少女の一念』は、男児を求める父親が長

期に家を空けるなか、気に病んだ病身の母がますます体調を崩したため、「村で評判の孝行娘」玉子が母親の体を丈夫にして赤ん坊を埋めるように村の天満宮に願掛けをした結果、母の体調が回復すると共に男児を出産し、父も帰宅しどこにも行かないと告げる物語である。

玉子の家は「代々の富豪家」であり、「お金で自由になるものなら、何一つ思ふやうにならぬことはなからうと云ふ程、結構な身分」であり、語り手も「実に羨ましいくらいであります」と語るが、「何うしてもお金では得られないと云ふ、悲しい事」があつたとして男児のいないことによる父母の不和をあげる。

玉子の願掛けはその解消を目的としているが、願掛けの途中での母の回復や願掛けが終わったの後の母の出産を考えると、母の体調不良はどうやら妊娠していたためであり、「お父様は嫌がつて始終東京へばかり出てゐて、一向お家にお帰りにならぬ」いことも母や玉子が不安に思っていただけで出産日には帰宅しているところを見ると実際にはそうではなかったのだろう。語り手がうらやましがる玉子の主観に引きずられた表現が示されている。とすると、玉子の親孝行の「一念」を語る物語は、親を

心配する気持ちを強調する一方で、出産・和解には全く関与しない玉子の空回り・妄想を語る物語である。もちろん、空回りであっても母が「涙を零してお悦びにな」ったのは玉子が自分を心配しているからだろう。

こうした展開の『少女の一念』は、角書が示すように「教育ニ關スル勅語」の「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ」という一節をお伽噺としたものである。しかし、母が病氣ないし虚弱であるならば母を丈夫にするのは医者の治療や母本人の運動であろう。しかし、葉は「中々急に癒りさうにない」ということで玉子は、願掛けへと至る。天満宮を参拝することは、「何百という高い石段は、見上げると唯幅がだん／＼狭くなつて見えるばかり、逆も可弱い女などの登られさうな所ではありません」とされ、「何しろ危険いところ」であり、「平常は滅多と参詣するものは」なく玉子の決意は「大した覚悟」とされる。仙人に課題を与えられること、狛犬や大牛など神威と結びついた存在を飛び越えていくこと、大臣といった権威と結びついた存在の障壁を突破すること、一日一段ずつ前日よりも高く登れるようになること、といった実効性を持たない努力の積み重ね、試練の突破だけが目指される。

玉子が仙人に「私は如何困難でも忍びます。親の為めならどんな辛い事でも嫌と思ひません」という決意を語ることもその精神主義を示していよう。

玉子は毎夜、祈禱がすむと安心して眠ってしまい、目覚めると家のお座敷で寝ていた。これは夢の中での参拝とも、実際に参拝しつつ神の加護により帰宅していたとも考えられるが、少女の一念による加護の獲得と空回りという物語の二面性はどちらの読解も可能にしよう。「毎晩上まで登りもしないで、例も途中で帰つて了ふんだもの、真実にずるいよ、だから私達は神様に告げて願の叶はぬやうにしてやるのだ」、「玉子さんの親孝行も偽なんだ」という狛犬たちの発言は、物語の試練と共に空回りをも示唆しているとも読み取りうるからである。

このように、『少女の一念』で描かれるのは実効性のある合理的な孝行ではなく、非合理的な妄想であるが、やがてその後の「念仏の家」の結核の妄想にも受け継がれていく。

さて、この十年の私は、こうした浅い作品解釈を主軸としていたが、そろそろもう少し丁寧に取り組む必要があるだろうと思うようになった。少しずつ努力したい。